

## 『詩經』「禘風」詩考

福本郁子

### (一)

殷代に於いて風は主に「帝（＝禘）」祭と「𡗗（＝寧）」祭によつて祀られた。契文の用例から推すに、禘祭による風神祭祀は、季節毎に吹く順風が雲を呼び、雨をもたらし、穀物の生育を促すことを希求する爲のものであつた。また寧祭による風神祭祀は、穀物の生育を阻む旱天や水害の引き金ともなる暴風を鎮める爲のものであつた。

拙稿『詩經』「寧風」詩考<sup>(1)</sup>に於いては、右のうちの「寧祭」による風神祭祀に該當する詩である邶風・終風篇、小雅・節南山之什・何人斯篇、同谷風之什・谷風篇の原義解釋を試みた。本稿に於いては、もう一方の「禘祭」による風神祭祀に起源を有すると考えられる詩、邶風・凱風篇、同北風篇、檜風・匪風篇、鄭風・稗兮篇、大雅・生民之什・卷阿篇の原義を解釋し、これらの詩に謠われる風の興詞が、風の「穀物の生育を促す」呪力に起因するものであり、それが人間にもたらす類感呪術的な力が女性に懷妊や多産をもたらし、延いては集團にとつての繁榮をもたらす呪物として謠い込まれたことを論證する。

## (11)

風は他の神々と同様、善と惡の二面性を持つとされ、人々は善の風（＝順風）を我がもとに長くとどめ、その恩惠を多く享受しようとし、また惡の風（＝暴風）を鎮め、その被害を可能な限り回避しようとした。殊に農耕民にとっては年穀の豐饒を確實なものとする爲に、季節毎の定期的な祭祀が缺かさずに行われ、また風害を避ける爲に、不定期に風神祭祀が行われた。殷代に於いては、その定期的な祭祀が「帝（＝禘）」祭や「曰」祭であり、不定期の祭祀が「孚（＝寧）」祭であつた。風は順風で吹く限りに於いては、惠雨を呼び穀物の生育を促し、豐饒をもたらすと考えられていたのである。

かかる風神祭祀は殷代にのみ限るものではなく、後代に於いてもなお引き繼がれ、様々な農耕儀禮の中に密かに息づいていた。例えば、『國語』周語上には「先時五日、警告有協風至、王即齋宮、百官御事、各即其齋三日」と、王の籍田の儀禮に先立つ五日前に、「瞽（＝盲人の樂官）」が春風の到來を告げることが記されている。春の農耕儀禮に先立つて行われている點が留意すべきであろう。また、『山海經』大荒北經には「蚩尤作兵伐黃帝。黃帝乃令應龍攻之冀州之野。應龍畜水、蚩尤請風伯雨師、縱大風雨」と、風の神である「風伯」の名が、雨を司る神である「雨師」と併記されているが、この「風伯」の名は風を司る神の名として、長く祭祀の對象として繼承された。『史記』封禪書や『漢書』郊祀志上等に見える風伯の廟や祠はその名残である。その後も風伯や風神を祀る廟・祠・壇が各地に多く存在したことが、多くの文獻に記されている。これらが總て殷代より伝えられた風の「穀物の生育を促す」呪力を信じ、祀る爲のものであつたことは言を俟たない。

翻つて見るに、『詩經』の詩の中に、風を興詞に謠い込むことで直接的に穀物の豐饒を祈願する詩はない。しかし風の「穀物の生育を促す」呪力は、間接的な形で歌垣詩や婚姻の祝頌詩、祖靈祭祀詩に關わっている。では風の呪力は、かかる内容の詩にどのように關わっているのだろうか。以下に問題となる詩篇の原義を解釋し、檢證を試みる。

先ず歌垣詩を二篇解釋する。鄭風・薤兮篇と邶風・北風篇である。

鄭風・摯兮篇

第一章 摯兮摯兮、風其吹女。叔兮伯兮、倡予和女。

第二章 摯兮摯兮、風其漂女。叔兮伯兮、倡予要女。

(押韻 第一章 ○||鐸部韻、◎||歌部韻。 第二章 ○||鐸部韻、●||宵部韻)

〔語釋〕○「摯」は毛傳に「摯、槁也」とあり、これを鄭玄が「槁謂木葉也。木葉槁、待風乃落」としてより、從來落葉の意と解されてきた。しかし王引之が「摯、疑當讀爲摯。廣雅、棗、摯也」(『經義述聞』)と言ひ、高亨が「摯、借爲棗、木名、質堅硬、落葉晚」、また屈萬里も或説として「詩經棗雅卷二云、按山海經曰、甘棗之山、其水出焉、而西流注於河。其下有草、葵本而杏葉、黃花而夾實、其名曰棗、可以已瘡。其水在鄭衛之間、其地爲棗草所產」と言う如く、摯に解すべきである。王引之の引く『廣雅』に見える摯の別名「棗」は、水上靜夫によると和名マメガキである。<sup>(四)</sup>マメガキとは柴田桂太によると中國に古代から栽培されていた果樹で、現在の柿と比べて花も實も小さく、枝に鈴なりに實をつけるという。<sup>(五)</sup>後述する如く、その多實性故に興詞に使用されたものと考えられる。○「叔兮伯兮」の句は邶風・旃丘篇にも使用されており、これについて袁梅が「叔、伯、在本詩中是女子對其愛人的昵稱。相當于弟弟、哥哥、阿弟、阿哥」と、女子が思い慕う異性を呼ぶ稱と解するに従う。○「倡予和女」は陳奐が「倡予、予倡。予、我。……和女、女和。女、爾」と言う如く、「予」は私の意、「女」は爾(なんじ)の意。前出の「風其吹女」の「女」もこれに同じ。「倡」は高亨が「倡、亦作唱」、また程俊英等が「倡、即唱字。說文、倡、樂也。段玉裁注、經傳皆用爲唱字」と言う如く唱で、うたう意。「和」は程俊英等が「和、讀去聲、以歌聲相應和」と言う如く、歌聲に合わせてうたう、唱和する意。○「漂」は毛傳に「漂、猶吹也」とあり、『釋文』に「漂、本亦作飄」とある。飄、吹く意。○「要」は林義光が「要猶會也。禮記、要其節奏。要訓爲結、爲約、故有會合之義」と言う如く會の意で、第一章の「和」と同じく、相手に合わせてうたう、唱和すること。

〔訓讀〕

第一章 擗や擗や、風其れ女なんぢを吹く。叔や伯や、倡うたへば予われ女なんぢに和せん。

第二章 擗や擗や、風其れ女なんぢを漂ふく。叔や伯や、倡うたへば予われ女なんぢに要せん。

〔日本語譯〕

第一章 (たわわに實をつける) マメガキの木、マメガキの木、風がおまえに吹きつける。おにいさんおにいさん、あな

たがうたうなら私もあわせてうたいましょう。

第二章 (たわわに實をつける) マメガキの木、マメガキの木、風がおまえに吹きつける。おにいさんおにいさん、あな

たがうたうなら私もあわせてうたいましょう。

この詩の詩意について、毛序は「擗兮、刺忽也。君弱臣強、不倡而和也」と、忽(＝鄭の莊公の太子忽)を諷する詩であるとする。これに對して朱熹は「此淫女之詞」と、淫亂な女の詩であると解する。朱熹が詩意を「淫亂」または「淫亂を刺る」詩とするのは、實は非常に示唆的で、それは往々にして歌垣詩である場合が多い。男女が互いに異性を求める行爲を指して、ふしだらであるとしたのであろう。擗兮篇は女性が男性を求めて誘引する歌垣詩である。程俊英・蔣見元は既にこの詩の詩意を「這首詩可能是當仲春『會男女』的集體歌舞曲。稱叔稱伯、顯然是女子帶頭唱起來、男子跟着應和的。而且不止兩個人、而是一群男女的合唱。周禮媒氏、仲春之月、令會男女。於是時也、奔者不禁。若無故而不用令者、罰之。司男女之無夫家者而會之。說明了詩的社會背景」と、歌垣詩であると指摘しており、我が國に於いても目加田誠・境武男・赤塚忠・白川靜等が同様の解釋をしている。

各章首二句「擗兮擗兮、風其吹女」「擗兮擗兮、風其漂女」について毛傳は「興也」と言う。二句目に風を謠い込む興詞である。先ず一句目に見える「擗」であるが、語釋で既に述べた如く、擗・擗棗で、和名はマメガキである。マメガキが枝にたわわに實をつける果實だとすると、この詩の興詞の「主」に當たる呪物は「擗」で、「風」はその「從」に當たるものである。興詞中の「主」と「從」の關係とは、この場合は多産をもたらし呪力をもつものが「主」で、その多産性を間接的

に助ける呪力をもつものが「従」ということである。

たわわに實をつける植物の實が、「多實↓多子」という類感呪術（類似のものが互いに影響し合うという法則にもとづく呪術）的な發想によつて、多産の呪物として興詞中に使用された例は他にもある。例えば唐風・椒聊篇の例を挙げると、第一章に「椒聊之實、蕃衍盈升（椒聊の實は、蕃衍して升到に盈つ）」「房<sup>ふ</sup>なりのサンショウの實は、繁り稔<sup>ね</sup>つて升到に滿ちるほど」と謠われ、「椒聊之實（↑たわわに稔つたサンショウの實）」の句を興詞に使用することで、新婦の速やかな懷妊と多産を言祝ぐ詩が構成されている。<sup>(7)</sup> 薺<sup>さい</sup>兮篇の「薺」もこれと同じで、マメガキの多實性を人間の多子性に關連づけるという類感呪術的な發想から興詞中に使用されたものである。

先の程俊英・蔣見元が指摘する如く、この詩が男女によつて唱和されたものとする、各章の前半二句は男子が謠い、後半二句は女子が謠つたものと推測できる。かく考えると二句目の「女<sup>なんぢ</sup>」とは薺樹を指すと同時に女子をも指し、四句目の「女」は男子を指しているということになる。ここに風の「穀物の生育を促す」という呪力を兼ね合わせて考えると、「薺樹に風が吹いて芽吹くように、女子にも風が吹いて新しい生命を宿して欲しい」ことを願う興詞と解し得る。その根底には如上の類感呪術的な考え方があるとみるべきで、風の持つ「豐饒↓多産」の呪力が、薺樹にもたらされると同じように女子にももたらされんことを期待する興詞ということになろう。

## 邶風・北風篇

第一章 北風其涼、雨雪其雩。惠而好我、攜手同行。其虛其邪、既亟只且。

第二章 北風其嘒、雨雪其霏。惠而好我、攜手同歸。其虛其邪、既亟只且。

第三章 莫赤匪狐、莫黑匪烏。惠而好我、攜手同車。其虛其邪、既亟只且。

（押韻 第一章 ○||陽部韻、◎||魚部韻。 第二章 ●||脂部韻、△||微部韻…脂微合韻。◎||魚部韻。 第三

## 章 ◎ 魚部韻

〔語釋〕○「涼」は、王先謙が「涼、寒貌也者、玉篇水部引韓詩文。……白虎通、涼、寒也、陰氣行也、言涼則寒至矣。皮嘉祐云、列子湯問篇注引字林、涼、微寒。釋名釋州國、涼州、西方所在寒州也。是涼有寒義」と言う如く、寒い様、冷たい様を形容する語。○「雨」は屈萬里が「雨、作動詞解」、また袁梅が「在此是動詞、雨雪、是下雪的意思。漢書李廣蘇建列傳、『天雨雪、武臥嚙雪、和毡毛并咽之』、雨、是落、降之意」と言う如く動詞に解すべきで、「ふール」と讀む。○「雱」は毛傳に「雱、盛貌」、集傳に「雱、雪盛貌」とあり、袁梅が「與滂字通。形容雨雪下得很大。詩集傳、雱、雪盛貌。雱、又作霏、雱、滂」と言う如く、雱、霏、滂に通じ、雪がひどく降る様を形容する語。○「惠而」の「惠」は、毛傳に「惠、愛」とありいつくしむこと。「而」は王先謙が「古然、而同字。惠而好我、猶言惠然好我、與終風、惠然肯來句例同」と言う如く、形容詞を作る助字の「然」と同字で、「惠而」は「惠然」の意である。王引之も終風篇の「惠然肯來」を「惠而肯來」であると言う（『經傳釋詞』）。「而」字は訓讀では讀まずに、「惠而」は「惠として」と訓ずる。いつくしむ様を形容する語。○「攜手同行」「攜手同歸」「攜手同車」は、聞一多が指摘する如く結婚を暗示する句であり、『詩經』の「行」字の用例には嫁ぐ意に解すべきものも多いが、ここは上に「攜手」や「同（ともーこ）」とあるので、「攜手同行」は「手を攜たずさへて同ともに行かん」と讀む。第二章の「歸」も「行」と同義で行く意、第三章の「車」は馬車を走らせて行く意と解する。○「其虛其邪」については馬瑞辰が「虛者、舒之同音假借、邪者、徐之同音假借。野有死麕傳、舒、徐也。虛、徐二字疊韻。淮南子原衝訓注云、原泉始出虛徐、流不止、以漸盈滿。正以虛徐爲徐、虛徐即舒徐也」と言う如く、「虛」は舒の假借字、「邪」は徐の假借字で、いずれもゆつくりする様、遅い様を形容する語。屈萬里が「其虛其邪、猶言慢了吧、慢了吧。欲速之辭也」と言う如く、早くせよと急かす意を表す句。但し、屈萬里はこの詩を「此蓋詩人傷國政不綱、而偕其友好避亂之作」と、酷い政治の行われている國から逃げようとする内容に解しているが首肯し難く、結婚を象徵する句を謠い込んだ歌垣の詩であると考ええる。結婚を象徵する句とは、各章三、四句目の「惠而好我、攜手同行」「惠而好我、攜手同歸」「惠而好我、攜手同



車」で、謠い手（女性）が男性を急かす意と解される。歌垣を背景に謠われたものと考え、女性が男性に早く自分を誘ってくれと誘引する意味をもかけているのであろう。○「既」は聞一多が「猶太也。既訓已、已有太義。孟子離婁篇、『仲尼不爲已甚者』。故既亦訓太。『既亟只且』、猶言『太疾也哉』也。荀子子道篇、『今汝衣服既盛、顔色充盈、天下且孰肯諫汝矣』、韓詩外傳三、說苑雜言篇、既作甚。甚與太義同」（『詩經通義（乙）』）と言う如く、甚だしい意。○「亟」は毛傳に「亟急也」とあり、陳奐が「爾雅、愾、急也。釋文、愾、本或作愾。又作亟」と言う如く、愾・愾にも作る。急、いそぐ意。○「只且」は集傳に「只且語助辭」とあり、王引之も「只亦句中語助也」（『經傳釋詞』）、王先謙も「只且、語助」と言う如く、語助詞で、訓讀では特に讀まない。○「啗」は、馬瑞辰が「啗、玉篇作飶、云疾風也、此後人增益字。啗當作潜、又通潜。說文潜字注、一曰、潜、水寒也。引詩風雨潜潜、卽鄭風風雨淒淒之異文。邶風傳、淒、寒風也。蓋水寒曰潜、風寒亦爲潜、其啗猶其涼也」と言う如く、潜・淒とも表記し、水や風の冷たい様を形容する語で、第一章の「涼」と同義。○「霏」は、毛傳に「霏、甚貌」とあり、陳奐が「霏、甚兒。甚與盛同」と言う如く、程度が甚だしいこと。○「莫赤匪狐」の「匪」は、陳奐が「匪、非也」と言う如く、否定詞の非（あらざる）と同義。

#### 〔訓讀〕

第一章 北風其れ涼たり、雪雨ること其れ霏たり。惠として我を好せば、手を攜へて同に行かん。其れ虚し其れ邪し、既だ亟がなん。

第二章 北風其れ啗たり、雪雨ること其れ霏たり。惠として我を好せば、手を攜へて同に歸せん。其れ虚し其れ邪し、既だ亟がなん。

第三章 赤として狐に匪ざる莫く、黒として烏に匪ざる莫し。惠として我を好せば、手を攜へて同に車せん。其れ虚し其れ邪し、既だ亟がなん。

#### 〔日本語譯〕

第一章 北風は冷たく吹き荒び、雪をも降らせる。私のことを深く愛してくれるなら、手に手をとってともに行きましょ

う。ぐずぐずせずに、さあ早く。

第二章 北風は冷たく吹き荒び、雪をも降らせる。私のことを深く愛してくれるなら、手に手をとってともに行きましょ

う。ぐずぐずせずに、さあ早く。

第三章 赤いのはキツネ（「女をたぶらかす悪い男」、黒いのはカラス（「男をたぶらかす悪い女」）。（誘惑に惑わされな

いで）私のことを深く愛してくれるなら、手に手をとって馬車を走らせ行きましょ。ぐずぐずせずに、さあ早く。

この詩意について毛序は「北風、刺虐也。衛國竝爲威虐、百姓不親、不相攜持而去焉」と、衛の虐政を刺る詩で、苦しむ民が國を棄てて逃げるを諠ったものとする。朱熹も略毛序説を踏襲して、「北風雨雪、以比國家危亂將至、而氣象愁慘也。故欲與其相好之人、去而避之」と述べる。この詩は既に境武男・目加田誠・赤塚忠・白川靜によつて歌垣詩であることが指摘されている。<sup>(4)</sup>その點は他詩の用例からも疑いがないと言えるが、ここで考えるべき問題は、歌垣の内容と風を諠う各章首二句の表現法との關係である。

前二章に諠われる「北風其涼、雨雪其雱」「北風其嘒、雨雪其霏」については、毛傳には「興也」とある。これは風を呪物として諠い込む興詞であるのだが、「北風」「雨雪」と、良好とは言い難い氣象條件が併記されている。そもそも歌垣の行われる春の季節に「北風」が吹き「雪」が降るのはおかしい。つまりこの二句が、情景描寫などではなく、何等かの効果を用意した表現法であることは推測がつく。これは後述する第三章の「狐」「鳥」と同じく、世間の逆境を象徴する表現であると考ええる。則ち手に手をとって行く者達（「相愛の男女」）を取り巻く世間の荒波のようなものを表現しようとする意圖がうかがえるのである。このように如何なる逆境にあつても、連れ添つてゆこうとする男女を諠う句は、『詩經』の詩の中では歌垣詩や婚禮の祝頌詩に多く見られるものである。例えば、唐風・采芣篇には「人之爲言、苟亦無信。舍旃舍旃、苟亦無



然。人之爲言、胡得焉（人の爲言は、苟に亦信ずる無かれ。施を捨て施を捨て、苟に亦然りとする無かれ。人の爲言は、胡ぞ得ん）と、他人の僞言に翻弄されてはならぬと諺う句が見える。この句は相愛の男女の仲を裂こうとする障害を克服することで、相手への愛情の深さを示そうとするもので、采芣篇は歌垣に於いて異性に對する自己の愛情の深さを諺う詩であることわかる。<sup>(10)</sup>婚禮に於いて新婦の多産を言祝ぐ祝頌詩である鄭風・揚之水篇にも「無信人之言、人實迂女（人の言を信ずる無かれ、人實に女を迂はす）」と、采芣篇に類似した句が見える。<sup>(11)</sup>また中國の少數民族の間で行われている歌垣詩の中にも、采芣篇や揚之水篇と同じような表現法で男女間の愛情の深さを示すものがある。<sup>(12)</sup>これらの例から推すに、北風篇前二章の首二句もまた同様の表現法をとったものであることがわかる。しかしこのような表現を使つたが爲に、ここに諺われる風は興詞でありながらその呪術的意義が稀薄となつてしまつた例であると言える。

興詞とは直接の關係はないが、第三章首二句に見える「狐」「鳥」について少しく説明を附け加えておく。「狐」は、『詩經』中では「狐裘」の語で使用する例が最も多く、それ以外の用例は、本篇以外に衛風・有狐篇の「有狐綏綏」と、齊風・南山篇の「雄狐綏綏」がある。このうち有狐篇を見てみると、その第一章二句目には「在彼淇梁」とあり、「梁」は女性器の隱喩である。<sup>(13)</sup>そこに狐がいると諺われていることと、また各章四句目の「子之無裳」「子之無帶」「子之無服」が服を脱いで強引に誘ってくる男子を指す句であることから、有狐篇は歌垣の戯れ歌と解釋し得る。従つて、「狐」は不埒な目的で女子を誘う男子の比喩で使われていることが理解される。一方、南山篇は婚姻に關わる内容を諺う歌垣詩であり、この「狐」もまた不埒な男子の比喩で使われている。以上二篇の用例から推すに、北風篇の「狐」もまた不埒な男子を指す比喩的表現と解すべきであらう。<sup>(14)</sup>

「鳥」の他篇の用例は小雅・節南山之什・正月篇のみである。同篇に用例は二つあり、第三章に「瞻烏爰止」、第五章に「誰知烏之雌雄」とある。第三章の「瞻烏爰止」については、毛傳に「富人之屋、烏所集也」、また鄭箋に「視烏集於富人屋」とあり、馬瑞辰は「瑞辰按、烏集富人屋、蓋相傳古說」と、富人の家の屋根に烏が集まると言うのは古の傳説ではな

いかと疑うも、特に根據を示していない。程俊英等は「詩人以烏鴉不知棲止在誰家屋上、比喻自己不知結局如何」と、如何にしたらいかわからぬことの比喻であるとしながらも、或説として「錢鍾書管錙編引張穆月齋文集云、二語深切著名、烏者、周家受命之祥。春秋繁露、同類相動篇引尚書傳言、周將興之時、有大赤烏銜穀之種而集王屋之上者、武王喜、諸大夫皆喜。凡此皆古文泰誓之言、周之臣民、相傳以熟。幽王時天變疊見、訛言朋興、詩人憂大命將墜、故爲是語。是詩人以烏象徵周王朝、可備一説。這章是詩人自傷不幸、憂民憂國」と、烏を周王朝の受命の吉祥とする解釋を擧げている。王先謙も「漢書郭太傳、陳蕃竇武爲閹人所害、林宗哭之、既而歎曰、人之云亡、邦國殄瘁。瞻烏爰止、不知于誰之屋耳。李注、言不知王業當何所歸。郭鄭同時、郭之解詩與箋意合」と、『漢書』郭太傳中の該句の解釋部分を引き、鄭箋の解釋はこれと同じであると指摘しており、これも國家が衰えて受命の吉祥たる烏が降りる所を知らぬ意と解釋するものである。受命の象徴とされる烏とは、即ち天帝の使者であり、これは烏が種類を問わず神聖視されていたことの名残りであると考えられる。<sup>(一五)</sup> 一方、第五章の「誰知烏之雌雄」は、烏の雌雄は誰も見分けられないことを言うもので、烏の神聖性は全く認められない。明らかに神聖性の認められる烏と、それが認められない烏の兩者が一篇の詩の中に混在するのは通常では考え難い。従って、正月篇第二章と第五章は本來、成立の異なる詩であつた可能性がある。<sup>(一六)</sup>

では北風篇に見える「烏」の神聖性はどうか。第三章首二句に「莫赤匪狐、莫黑匪烏」と、「烏」は「狐」と併記されている。既に述べた如く、「狐」は不埒な男子の比喻で、當然神聖性は認められない。ならば、これと併記されている「烏」もまた神聖性はないものと考えるべきであろう。<sup>(一七)</sup> 「莫赤匪狐、莫黑匪烏（赤として狐に匪ざる莫く、黒として烏に匪ざる莫し）」は、「赤いのはキツネ（＝悪い男）で、黒いのはカラス（＝悪い女）」と、相愛の男女を誘惑する不埒な男女が世間には大勢いることを謠う句である。従って、前二章の「北風其涼、雨雪其雱」「北風其喈、雨雪其霏」と同様、相愛の男女を取り巻く世間の逆境を象徴的に表した句と解される。

前二章のみを見れば、北風篇は婚姻の祝頌詩とも解し得る。しかし第三章の「狐」「烏」をかくの如く不埒な男女の比喻

と解すると、戯れ歌の要素を含むこの詩は、歌垣詩と解さざるを得ないであろう。

次に検証する詩は、婚禮の祝頌詩（檜風・匪風篇<sup>(二八)</sup>）と、これと同系統の詩（邶風・凱風篇<sup>(二九)</sup>）である。

檜風・匪風篇

第一章 匪風發兮、匪車偈兮。顧瞻周道、中心怛兮。

第二章 匪風飄兮、匪車嘒兮。顧瞻周道、中心弔兮。

第三章 誰能亨魚、漑之釜鬻<sup>△</sup>。誰將西歸、懷之好音<sup>△</sup>。

（押韻 第一章 ○||月部韻。 第二章 ●||宵部韻。 第三章 △||侵部韻）

〔訓讀〕

第一章 匪<sup>か</sup>の風發たり、匪の車偈<sup>いた</sup>たり。周道を顧瞻しては、心怛<sup>いた</sup>む。

第二章 匪の風飄たり、匪の車嘒<sup>いた</sup>たり。周道を顧瞻しては、心弔<sup>いた</sup>む。

第三章 誰か能く魚を亨<sup>に</sup>ん、之が釜鬻<sup>あら</sup>を漑はん。誰か將に西へ歸<sup>とつ</sup>がんとす、之が好音を懷<sup>おく</sup>らん。

〔日本語譯〕

第一章 風は激しく吹き荒び、（新婦を乗せた）車は速く駆け抜ける。（故國を隔てる境界の）道の隈を遙かに眺めては、

（乙女は別れた家族を想い）心傷める。

第二章 風は激しく吹き荒び、（新婦を乗せた）車は速く駆け抜ける。（故國を隔てる境界の）道の隈を遙かに眺めては、

（乙女は別れた家族を想い）心傷める。

第三章 魚を煮るのは誰だろう、（魚を煮るなら）大金きれいに洗いましょう。西へ嫁ぐは誰だろう、（嫁ぐなら）めでた

いことば授けましょう。

この詩の詩意を毛序は「匪風、思周道也。國小政亂、憂及禍難而思周道焉」とし、朱熹は「周室衰微、賢人憂嘆而作此詩」とする。以降、これらを踏襲する説と、征夫が故郷を懐かしむ詩とする説とに分かれるようである。<sup>(10)</sup>

この詩が婚姻詩と解釋される理由は、前二章に見える「周道」の語が境界神を祀る場所であつたことと、第三章に「誰能亨魚、漑之釜鬯」と、魚の興詞が使用されていることである。「周道」は自國と外部を象徴的に分斷する境界領域として認識され、詩中にこそ謠われてはいないが、そこで境界神を祀り、他國へ行く者の安全が祈願されたと考えられる。境界神に祈りを捧げる「周道」という場所は、出立する者にとって親しい者との別れの場所でもあつた。<sup>(11)</sup> 魚の興詞については家井眞が既に論じている如く、その多産性故に大地に豐饒をもたらすとともに女性に多産をもたらすとされた呪物であつた。<sup>(12)</sup> これに加えて魚の興詞の下には「誰將西歸」とあり、「歸」は「歸ぐ」と解されること、<sup>(13)</sup> 更にその下の「好音」の語は、『詩經』中に於いては、福祿を約束する言葉、言祝ぎの言葉と解し得ることから推すに、第三章に見える魚は、他國へ嫁ぐ女性の速やかな懷妊と多産を祈願する爲に謠い込まれた興詞であると考えられる。魚の興詞が新婦となる女性の懷妊・多産を祈る爲のものであるならば、先の「周道」を「顧瞻」しつつ胸を痛めるのは、嫁いで行く女性ということになり、「顧瞻周道、中心怛兮」「顧瞻周道、中心弔兮」とは、他國へ嫁ぐ女性が來た道を遠く振り返りつつ、別れたばかりの家族を思い、胸を傷めるを謠う句と解せられよう。

かく考えると、前二章に謠われる「匪風發兮」「匪風飄兮」は、風の「穀物の生育を促し豐饒をもたらす」呪力が類感呪術的に新婦の速やかな懷妊と多産をもたらす興詞として謠い込まれたものとみるべきであろう。つまり匪風篇前二章に風の興詞が謠い込まれた理由は、第三章に魚の興詞が謠い込まれた理由と全く同じということになる。匪風篇は嫁いで行く女性の速やかな懷妊と多産を祈願する祝いの詩と解することができる。

次に解釋する邶風・凱風篇は、前二章に見える「凱風自南、吹彼棘心」「凱風自南、吹彼棘薪」が、先の鄭風・蓍兮篇首

二句の「擗兮擗兮、風其吹女」「擗兮擗兮、風其漂女」と發想的にととても近い句である。

擗風・凱風篇

第一章 凱風自南。吹彼棘心。棘心夭夭。母氏劬勞。

第二章 凱風自南。吹彼棘薪。母氏聖善。我無令人。

第三章 爰有寒泉。在浚之下。有子七人。母氏勞苦。

第四章 睨睨黃鳥。載好其音。有子七人。莫慰母心。

(押韻 第一章 ○||侵部韻、◎||宵部韻。 第二章 ●||眞部韻。 第三章 △||魚部韻。 第四章 ○||侵部韻)

〔訓讀〕

第一章 凱風南よりし、彼の棘心を吹く。棘心夭夭たれば、母氏劬勞せり。

第二章 凱風南よりし、彼の棘薪を吹く。母氏聖善なるも、我令無き人。

第三章 爰に寒泉有り、浚の下に在り。子七人有り、母勞苦せり。

第四章 睨睨たる黃鳥、載に其の音を好くす。子七人有り、母心を慰むる莫し。

〔日本語譯〕

第一章 大きな風は南からやってきて、小さなナツメの木に吹きつける。小さなナツメの木が若々しく茂ると(子は育ち)、

母は苦勞のしどおしだ。

第二章 大きな風は南からやってきて、茂れるナツメの木に吹きつける。母は聴く善き人なるも、(子である)我等は愚

か者。

第三章 清冷な水を湛えた泉は、浚の邑にある。子は七人、母は苦勞のしどおしだ。

第四章　カンカンと鳴くコウライウグイスは、（吉兆を告げる）よい音色で鳴く。子は七人、母の心は休む間もなし。

この詩の詩意は、毛序が「凱風、美孝子也。衛之淫風流行、雖有七子之母、猶不能安其室。故美七子能盡其孝道、以慰其母心。而成其志爾」と、七人の子を持つ母親に孝行を盡くした子を讃える詩であるとし、朱熹も「衛之淫風流行、雖有七子之母、猶不能安其室。故其子作此詩」と毛序と略同じ解釋である。孝子の自責を諺うとする部分は現在でも略踏襲されているようである。

この詩は第一・二章、第三章、第四章にそれぞれ異なつた種類の興詞が使用されている。第一・二章には風の興詞、第三章には水の興詞、第四章には鳥の興詞が見える。

水の興詞は豊饒と多産をもたらす呪物であるが、下に「有子七人」と、多子を示す句が見えていること、更にその下に「母氏苦勞」と、母親の勞苦を示す句が見えていることから推すに、ここでの祈願の目的は多子、則ち懷妊や多産にあるものと推測される。既に多子をもっているのではない。多子の實現を願望する意圖を読み取らねばならない。更にここから、第一章に見える「母氏劬勞」も同様に多子故の勞苦を指すのではないかという推測も可能であろう。

一方、第四章にも多子故の母親の勞苦を諺う句が見える。ここの多子は上句の興詞中に呪物として諺い込まれている鳥（黃鳥）と無關係ではない。古くは、子は天帝の使者である鳥によつてもたらされると信ぜられていたからである。『詩經』の詩の興詞中に諺われる鳥は、その種類に關係なく神や祖靈等の魂の象徴と見なされた。ここで諺われている鳥は祖靈の象徴であり、天帝の命を受けて子授けの爲に人間界に飛來すると考えられていたのである。<sup>（六）</sup>「黃鳥」が飛來し、「載好其音」と良い音色で鳴くとは、即ち妊娠を告げる吉兆を意味していることになる。

以上により第三章と第四章の興詞は、種類は異なれど、使用された目的は同じであることがわかった。かく考えると第一・二章の風の興詞もまた、女性の懷妊多産を目的に使用されたものであることが理解されよう。

この詩は恐らく婚姻詩の範疇に含まれると考えられるが、詩中には婚姻を表す語が全く見られない。婚禮に於いて新婦の



懷妊多産を祈願する詩と解されるが、或いは子に恵まれぬ既婚女性の懷妊多産を希求する爲に謠われた可能性もあろう。

最後に祖靈祭祀に於いて祖靈から祭主たる族長に暇辭が授けられる場面を謠う詩の風の興詞について檢證したい。全十章からなる詩であるが、前六章は五句、後四句は四句で構成されている。そのうちの前六章のみを解釋する。

大雅・生民之什・卷阿篇

第一章 有卷者阿、飄風自南。豈弟君子、來游來歌、以矢其音。

第二章 伴奭爾游矣、優游爾休矣。豈弟君子、俾爾彌爾性、似先公曾矣。

第三章 爾土宇畝章、亦孔之厚矣。豈弟君子、俾爾彌爾性、百神爾主矣。

第四章 爾受命長矣、弗祿爾康矣。豈弟君子、俾爾彌爾性、純嘏爾常矣。

第五章 有馮有翼、有孝有德、以引以翼。豈弟君子、四方爲則。

第六章 顓顓卬卬、如珪如璋、令聞令望。豈弟君子、四方爲綱。

(押韻 第一章 ○〓歌部韻、◎〓侵部韻。 第二章 ●〓幽部韻。 第三章 △〓侯部韻。 第四章 ▲〓陽部韻。

第五章 ▽〓職部韻。 第六章 ▲〓陽部韻)

〔語釋〕○「有卷者阿」の「阿」は曲がりくねって入り組んだ山の隈の意。「有卷」は曲がる様を形容する語。「有卷者阿、飄風自南」とは、南にある入り組んだ山の隈から飄風が吹くことを謠う句。○「豈弟」は『詩經』中では齊風・載馳篇の

「齊子豈弟」が初出。「豈弟君子」の句は總て雅に收録されており、本篇の他には小雅・南有嘉魚之什・湛露篇、同甫田之什・青蠅篇、大雅・文王之什・旱麓篇、同生民之什・泂酌篇に見える。載馳篇に於いて林義光が「豈弟在諸詩多爲樂易之義。此詩豈弟獨與諸詩不同。……豈弟爲闔閭之轉音。鄭玄讀弟爲闔。其說本於洪範之曰闔、古文尙書作曰弟。闔閭有二義、訓爲樂易者、其本字爲愷懌。他詩之豈弟君子是也。訓爲發者、其本字爲開釋」と言う如く、本篇及び雅の諸篇に見える「豈弟」

は闔圉の轉音したもので、本字は愷懌。樂易、たのしむ意。因みに載馳篇の「豈弟」だけは本字が開釋。○「君子」は祖靈<sup>(二六)</sup>。○「來游來歌」の「來」は陳奐が「來、語詞」と言い、また裴學海が「來猶是也」と言う如く「ここー二」と讀む語助詞。○「矢」は毛傳に「矢、陳也」とあり、陳で、つらねる意。○「伴奭爾游矣」の「伴奭」は高亨が「伴奭、當讀爲盤桓、回還往來之意」と言う如く、盤桓、ぐるぐると回る、めぐる様を形容する語。「爾」は『經詞衍釋』に「爾猶乃也」とあり、「ここー二」と讀む語助詞。「游」は聞一多が周南・漢廣篇の「游女」を「游女既爲水神、則游之義當爲浮行水上、如洛神賦云、凌波微步、羅襪生塵之類。詩曰、漢有游女、不可求思、下卽繼之曰、漢之廣矣、不可泳思、江之永矣、不可方思。夫求之必以泳以方、則女在波上、審矣。文選羽獵賦曰、漢女水潛。說文水部、泳、潛行水中也、爾雅釋言、泳、游也、注、潛行游水底、方言十、潛亦遊也、注、潛行水中亦爲遊也、游與遊通。蓋游與泳潛對文異、散文通」(『詩經新義』)と解している如く、水上を浮行する意。『詩經』の詩に於いて「游」字を用いて遊行する者とされるのは、一は神や祖靈であり、一はそれを追いかけて神遊びする巫覡である。例えば水神祭祀詩である周南・漢廣篇に見える「游女」は、水神が水上を自在に浮遊することからくる附名であるし、また同じく水神祭祀詩である秦風・兼葭篇には、「遡游從之」と、巫が遊行する水神を追つて神遊びすることが謠われている。本篇に於ける「游」の主語は、祖靈を祀る側の人間であり、詩中に描かれてはいないが、恐らくは巫祝であつたと考えられる。○「優游」は小雅・魚藻之什・采芣篇「優哉游哉」の鄭箋に「優游時安止於是」とある如く、ひとところに安んじてとどまる様を形容する語。「優游爾休矣」の句は、水神祭祀詩である小雅・鴻鴈之什・白駒篇の「愼爾優游、勉爾遁思(愼に爾優游たれ、爾の遁るを勉れよ)」と略同じ意である。白駒篇の該句は、「水神よ、まことに安んじ居り給え、他の場所へと移り給うな」と、水神の來臨を歡待して永く一族のもとにとどめようとする句である。○「俾爾彌爾性」の「俾」は鄭箋に「俾、使也」とあり、また陳奐も「俾當作卑。下同」と言う如く、「しーム」と讀む使役の助字。この句の「爾」は二字とも「なんち」と讀む。祭主たる族長を指して呼ぶ稱。「彌」は馬瑞辰が「彌者、彌之假借。段玉裁曰、蓋用弓部之璽而又省玉也。說文、彌、久長也。惟久長、是以能終。胡承珙曰、終者、盡也。彌其性即

盡其性也」と言う如く彌の假借字で、長久、永くする、永遠にする意。「ながークス」と讀む。「性」は林義光が「性讀爲生。俾爾彌爾性、謂使汝長生也。蔡姑敦、用祈眉壽綽綽永命彌厥生令終、齊侯罇、用求考命彌生、皆以彌生爲長生」、また于省吾が「按、生、性古通。蔡姑敦、彌氏生。齊罇、用求考命彌生」(『澤螺居詩經新證』)、屈萬里が「王國維與友人論詩書中成語書云、彌性、卽彌生、猶言永命矣。此祝其長壽也。叔使孫父敦(嘯下)、永令彌厥生。蔡姑敦(三代六)、永令彌厥生。鞫罇(三代一)、用求考命彌生」と言う如く、生で、生命、壽命の意。「彌性」とは長生のことで、壽命を永くする、永く生きる意。林義光等が指摘する如く、「彌性(生)」は金文にも見える語である。またこの語を含む第二章から第四章の句の構成を見ると、通常、『詩經』の詩句が四字句で構成されることが多いのに對して、四字句と五字句が混在している。更に押韻法も亂れていることから、この詩の第二章から第四章は構成的には金文に比較的近いようである。○「似先公箇矣」の「似」は魯詩は「嗣」に作る。毛傳に「似、嗣也」とあり、また陳奐が「似讀與嗣同」と言う如く、嗣ぐ意。「箇」は馬瑞辰が「箇之言久也、就也、久則有終、就亦終也、故爾雅訓爲終」と言う如く久で、永くする、永遠にする意。「ひさしークス(フス)」と讀む。この句は小雅・鴻鴈之什・斯干篇の「似續妣祖(妣祖に似續せん)」や、周頌・良耜篇の「以似以續(以て似し以て續せん)」と略同義で、祖先祭祀を繼續して絶やさない意。<sup>(二九)</sup>本篇では君子(＝祖靈)からの暇辭と解すべきであるので、祖先祭祀を繼續せよ、という意。○「爾土宇畝章」の「土宇」は鄭箋に「土宇謂居民以土地屋宅也」とあり、于省吾が「按、土謂邦國。土宇猶今人言邦家」(『澤螺居詩經新證』)と言う如く、邦家の意。「畝」は林義光が「畝、明也。韓詩寶之初筵篇威儀畝畝、畝亦明辨之意。畝辨古同音」と言う如く、畝も章もあきらかな様を形容する語。邦家の威儀があきらかであることを言う。○「孔」は鄭箋に「孔、甚也」とあり、甚で、はなはだしい意。○「百神爾主矣」は鄭箋に「使女爲百神主、謂羣神受饗而祐之」とあり、百神の祭主として祭祀を祐けることを言う。<sup>(三〇)</sup>○「爾受命長矣、弗祿爾康矣」については鄭箋に「弗、福、康、安也。……受壽長之命、福祿又安女」とあり、「弗祿」は福祿の意、「康」は安んずる意。該句は永く長壽を受け、福祿のもたらされんことを祈る意である。○「純嘏爾常矣」の「純」は鄭箋に「純、大也」とあり、

大の意。『說文』糸部に「純、同醇、厚也」とある如く、「純」には厚の意があり、ここから大の意が生じた者と考えられる。「嘏」は馬瑞辰が「因祭祀受福曰嘏、而大義担專屬於福。以漢人爾雅注例之、當曰、嘏、福之大也、傳但曰大、而福義自見。……又賈子禮篇曰、祐、大福也。嘏與祐音竝同、嘏亦爲大福」と言う如く祐で、大福の意。「常」は陳奐が「常猶長也」と言う如く長で、「ながークス（なごーフス）」と讀む。○「有馮有翼」は林義光が「馮翼、戴震云、馮、滿也。廣雅、馮、滿也。謂忠誠滿於內。翼、盛也。廣雅、翼翼、盛也。謂威儀盛於外」と言う如く、「馮」は滿で、滿ちる様、「翼」は盛で、さかなな様を形容する語。「有」は形容詞や副詞を作る助字<sup>(二)</sup>。該句は威儀の立派なことを表す。○「孝」は『尚書』太甲中「奉先思孝」の孔安國傳に「以念祖之德爲孝」とあり、祖先をしのんで思うことをいう。○「德」は『詩經』の詩に於いては、人間が神や祖靈に對して行ふ奉仕やその態度、或いはそのような人間に對する神や祖靈の恩恵を指すことが多い。ここはその前者で解すべきであろう。『詩經』が經典の一つであるが故に、詩中の「德」は、これまで行動規範としての德、道德の意に解されてきた經緯がある。しかし『詩經』の詩の「德」字には、そのように解し得る用例は實は殆どない。○「以引以翼」は高亨が「引、當讀爲寅、敬也。翼、亦敬義」と言う如く、「引」も「翼」も敬で、敬う意。○「四方爲則」「四方爲綱」の「爲」は裴學海が「爲猶之也。之、口語作的。爲訓之、猶于訓之也。詩卷阿篇、四方爲綱。假樂篇、四方之綱、文義同此。又、四方爲則。殷武篇、四方極、文義同此。極猶法也」と言う如く、之で、「の」と讀む。我が國では境武男が「四方爲則」を「四方の則なる」、「四方爲綱」を「四方の綱なる」<sup>(三)</sup>と訓讀している。○「顒顒」は毛傳に「顒顒、溫貌」とあり、溫和な様を形容する語。次の「印印」とともに祭主たる族長が祖靈を祀る態度をいう。○「印印」は鄭箋に「志氣則印印然高朗」とあり、氣高い様を形容する語。○「珪」「璋」は高亨が「珪、一種長條形上端尖的玉版。璋、長條而一端作斜銳角形的玉版。珪與璋都是古代貴族朝聘、祭祀、喪葬所用的禮器。此句指君子的品德如珪璋的可貴」と言う如く、兩者とも祭祀儀禮に用いた玉器で、「如珪如璋」は玉器のように貴いことをいう。但し、高亨がこれを下句の「君子」を指すと解するのは誤りで、「君子（＝祖靈）」を祀る祭主たる族長を讃える句と解すべきであろう。○「令聞」「令望」は高亨が「令聞令望、

好聲譽好名望」と言う如く、いずれもよきほまれの意。○「銅」は高亨が「銅、法」と言う如く、法の意。第五章の「則」と同義。

#### 〔訓讀〕

第一章 卷たる有るは阿、飄風南よりす。豈弟の君子よ、來に遊び來に歌はん。以て其の音を矢ねよ。

第二章 伴奂として爾に遊び、優游として爾に休へ。豈弟の君子よ、爾をして爾の性を彌くせしめ、先公に似ぎて曾ふせよ、と。

第三章 爾の土宇販章たり、亦孔だ之れ厚し。豈弟の君子よ、爾をして爾の性を彌ふせしめ、百神爾に主たれ、と。

第四章 爾の命を受くること長く、弗祿爾に康んぜん。豈弟の君子よ、爾をして爾の性を彌ふせしめ、純嘏爾に常くせよ、と。

第五章 馮たる有り翼たる有り、孝有り徳有り、以て引ひ以て翼ふ。豈弟の君子は、四方の則。

第六章 顒顒たり印印たり、珪の如く璋の如く、令聞あり令望あり。豈弟の君子は、四方の銅。

#### 〔日本語譯〕

第一章 南には曲がりくねった山の隈、そこから吹く飄風。樂しめる祖靈よ、（巫はあなたの御靈を追つて）神遊びし、（あなたの御靈を招かんと）歌をうたう。だからどうか我等に良き言葉を與え給え。

第二章 （祖先の御靈よ）巡り巡つて遊行し、（我がもとに）安んじ居り給え。樂しめる祖靈よ、（祭主たる族長に祖靈が次の暇辭を下され祝福された）「おまえはおまえの壽命を永遠にし、祖先の祭祀を繼續して絶やしてはならぬ」と。おまえ（＝祭主たる族長）の治める邦家（の威儀が）明らかにならんことを、また大いに豊かならんことを（祈る）。樂しめる祖靈よ、（祭主たる族長に祖靈が次の暇辭を下され祝福された）「おまえはおまえの壽命を永遠にし、百神の祭主として（神々をよく）祀れ」と。



第四章 おまえが永く長壽を受け、福祿のもとらされんことを（祈る）。樂しめる祖靈よ、（祭主たる族長に祖靈が次の嘏

辭を下され祝福された）「おまえはおまえの壽命を永遠にし、祖靈の下された大いなる福祿が永く續けよ」と。

第五章 （祭主たる族長が祖靈を祀る態度は）堂々として立派であり、祖靈をしのび誠實に奉仕して、愼み敬うことを忘

れない。（かくも立派な祭主に嘏辭を下された）樂しめる祖靈は、四方の國を守る法である。

第六章 （祭主たる族長が祖靈を祀る態度は）いとも温和でいとも氣高く、玉器の珪や璋のように貴く、良きほまれがある。

（かくも立派な祭主に嘏辭を下された）樂しめる祖靈は四方の國を守る法である。

この詩の詩意を毛序は「卷阿、召康公戒成王也。言求賢用吉士也」と、召の康公が成王を戒める詩とする。朱熹は「此詩舊說亦召康公作。疑公從成王游歌於卷阿之上、因王之歌、而作此以爲戒」と、召公が成王の歌にあわせてこの詩を作ったとする。

卷阿篇の詩意については解釋がまちまちで、第一章に見える「風」の興詞が詩全體にどのように關係しているかについて言及する者はない。唯一、赤塚忠だけがこの詩を「殷代の風祭りを繼承している」と指摘している<sup>(三三)</sup>。

この詩は第二・三・四章の四、五句目に「俾爾彌爾性、似先公酋矣」「俾爾彌爾性、百神爾主矣」「俾爾彌爾性、純嘏爾常矣」と、祖靈から祭主に下された嘏辭とみられる句があることから、祖靈祭祀詩を内容とする詩であると解される。風の興詞は第一章に見え、語釋で既に述べた如く「有卷者阿、飄風自南（卷たる有るは阿、飄風南よりす）」と、入り組んだ山の隈から飄風の吹くことが謠われている。更に附け加えるならば、第一章には「音」字が使用されており、これも先に述べた如く、檜風・匪風篇や邶風・凱風篇にも見えていたものである。繰り返しになるが、これらの詩はいずれも婚姻に關わる内容の詩で、「好其音」「好音」とは妊娠を告げる吉兆の言葉であり、また福祿を約束する言葉であった。ならば祖靈祭祀詩である卷阿篇の中にこの「音」が「以矢其音（以て其の音を矢ねよ）」と謠われているのは、祭主が祖靈に福祿を約する言葉、即ち嘏辭を求めていることに他ならない。



卷阿篇は祖靈祭祀に於いて嘏辭を求め、それがめでたく授けられたことを喜び、祖靈と祭主たる族長を讃える詩であると解せられる。

### (三)

『詩經』の詩の中には、風を興詞に謠い込むことで直接的に穀物の豊饒を祈願する詩は存在しない。しかし風の興詞が使用されている詩の一部は、間接的ではあるが穀物の豊饒を祈願する目的で謠われたものであることが理解されたと思う。「間接的に」と言うのは、「類感呪術的に」と換言してもよい。その代表的なものは『詩經』の詩に於いては歌垣詩である。早春の季節に、男女が掛け合いでうたを謠い、誘引し合い、戯れ合う眞の目的は、配偶者を求める爲ではなかった。子を多くもうけ、「多産↓豊饒」という類感呪術的な発想によつて、穀物の稔りを助ける爲であつた。風は人間に「多産↓豊饒」を授ける呪力をもつものとして、歌垣詩の中に興詞として謠い込まれたのである。

婚姻の祝頌詩や祖靈祭祀詩に風の興詞が使用される場合の祈願の目的は、歌垣詩の場合とはむしろ逆であつた。風の豊饒をもたらす呪力が更に「豊饒↓多産」という類感呪術的な発想によつて、女性に懷妊や多産を、延いては宗廟祭祀を中心とする祭祀集團に繁榮をもたらすものとして、婚姻の祝頌詩や祖靈祭祀詩の中に興詞として謠い込まれたのである。

農耕民族はかつて農作物の稔りを確實なものにする爲の技術と呪術を持っていた。やがて技術が高度に發達すると、それに附隨して行われていた呪術的な行爲は、その存在意義が稀薄となり、輕視され、多くは忘れ去られてしまった。

醫療技術が發達すると、これと同じことが起きる。醫術もまた、技術と呪術とが渾然一體となつていた時代があつた。そこには理に適つた技術もあれば、怪しいまじないもあつた。やがて醫術が發達し、妊娠や出産が呪術などではもたらされるものではないことが廣く知られるようになると、そのような行爲は行われなくなり、形骸化した行事や娛樂へと形を變え、

やがて忘れ去られてゆく。

殷代より傳えられた風の祭祀もこれと同様であつたと思われる。恐らくそれは『詩經』の中に興詞として謠い込まれた時點に於いて、既に形骸化していたのであろう。殊に『詩經』が儒者の經典とされ、新たな解釋を附與されてから以降は、風が詩の中に謠われる意味について、疑問の目が向けられることは殆どなかったはずである。故に風の興詞が歌垣詩の中に謠われ、婚姻の祝頌詩や祖靈祭祀詩の中で謠われた眞の理由は、殆ど傳えられることはなかったのである。

## 註

- (一) 『二松學舍大學論集』第五八號(二〇一五年三月) 所收。
- (二) 「瞽」は韋昭注に「樂太師、知風聲者也」とある。盲人の樂官のことである。
- (三) 『詩經』「寧風」詩考」一二七頁。
- (四) 『中國古代の植物學の研究』(角川書店 一九七七年) 一七五頁。
- (五) 『資源植物事典・増補改訂版』(北隆館 昭和二十四年) 七二六頁。
- (六) 目加田誠は「男が歌で女を誘うと、女が歌でそれに答えて、そこで戀が成り立つ。今も中國邊地に殘る風習だそうである。誘う水あらば、いなんとぞ思ふ、たわむれの歌」(『詩經譯注』(目加田誠著作集第二卷、龍溪書舍 昭和五八年) 一八六頁、境武男は「伯(太郎さん)よ、叔(三郎さん)よ、と呼びかける相手は、士人に對してよせる慕情の表現である。……ただ民歌は、そのような個人的抒情ではない」(『詩經全釋』(汲古書院 一九八四年) 一二九頁)、赤塚忠は「あけすけな挑み歌」(『詩經研究』(赤塚忠著作集第五卷、研文社 昭和六一年) 一〇頁)、白川靜は「女の誘引の歌。風に吹かれて散る葉は、誘うものあらばの比喩。叔でも伯でもよい。誘うものには靡こうという調子の歌」(『詩經國風』(平凡社・東洋文庫 一九九〇年) 二二三頁)と、皆彈兮篇を歌垣詩と解している。これに對し、高田眞治は「この詩を、誘う水あらばなびかんとする女心を咏するものとするのは、現代人の感覺に會いそうに思われるが、再考するに首肯しがたいものを感じる」(『詩經』上(漢詩選、集英社 一九九六年) 三三三頁)と、歌垣詩と解釋することを否定している。
- (七) 唐風・椒聊篇の詳しい解釋とサンショウの多實性については拙著『詩經』興詞研究(研文出版 二〇一二年) 三七八―三八二頁を參照。
- (八) 聞一多是「谷風篇」一章曰「攜手同行」、二章曰「攜手同歸」、三章曰「攜手同車」、歸即『之子與歸』之歸、此新婦贈壻之辭也。古詩十九首之十六曰「良人惟古歡、枉駕惠前綏、願得常巧笑、攜手同車歸」、說親迎事而語襲此詩、是其明證。詩又曰「同行」者、猶同歸也。女子謂嫁一日適、行亦猶適矣。有女同車篇一章曰「有女同車」、傳曰「親迎同車也」、而二章曰「有女同行」、本篇爲親迎而女不至之詩、而三章「駕予與行」與四章「駕予與歸」竝舉、是二詩之行亦竝謂嫁。以此推之、本篇及蝦蟇載馳竹竿諸篇之「有行」、皆謂適人耳」(『詩經通義』(甲)と述べる。
- (九) 境武男は「人目をしのんで逃げだす男女。北風雪花の中を「手を攜えて」という女子のことが前二章の『北風篇』であり、それが民謡化されて、さらに『赤いは狐、黒いは鳥』の末章が付加せられたもののようである。後の衛風有女同車篇では、警戒すべき男としての狐が歌われている」(註(六)前掲書一三七頁)と解する。目加田誠は『序』に、衛の君臣が暴虐で、百姓は相攜えて國を逃れたことという。朱熹もまた國家の危亂まさに迫ろうとするとき、仲の良い人と共に去ってこれを避けようとするが、その禍がすでに近づいていて、一刻も猶豫できぬことをいうとする。但し『北風』『雨雪』は冬の情景であり、狐や鳥もその間に、餌をねらって人里近く寄ってくるのでそれを冬の農閑期に女のもとに誘いよる男にたとえ、これに女たちが戯れる意味の歌と見

ることでもきよう」(註(六)前掲書一〇頁)と、傳統的解釋を擧げつつも、この詩が歌垣詩である可能性をも示唆している。赤塚忠は「誘いに乗る歌」、また『北風』は、もと祭祀の對象であつたが、ここではその時期を表し、かつ風が雲雨を招くように、男が女に誘いかける寓意を基調にしている。男が誘いかけるなら、寒い冬のことなので、うそでも好意を示すかぎり、氣取つてはいられぬ、いっしょにならうと諧謔味たっぷりに唱っている。祭祀の北風が、人を相手にする諧謔の導きになったのである」(註(六)前掲書九二〜九三頁)と解し、白川靜も「すきもの同志がさそいあう誘引の歌。北風・雨雪はたならぬ状態で、おだやかな愛情ではない、危険な關係を暗示する。狐と鳥はいずれも曲者。曲者同志の戯れを歌う」(註(六)前掲書一六二頁)と、いずれもこの詩を歌垣詩と解している。

(一〇) 註(七)前掲拙著三八八〜三九三頁。

(一一) 註(七)前掲拙著三九一〜三九二頁。

(一二) 註(七)前掲拙著三九二頁。

(一三) 註(一)前掲拙稿一四四〜一四五頁。

(一四) 「狐」は聞一多が「狐喻男」(『風詩類鈔』)とし、また境武男は「狐と鳥は邪淫の男女を暗示する。雪花の霏々たる季節、それは狐や鳥のしのび來るときであり、その性の淫なる動物とされる。切實な戀愛歌でなくて一種の戲笑の歌である」(註(八)一三七頁)と指摘する。なお、千葉徳爾『狩獵傳承』(法政大學出版局 一九七五年、一五九〜一七一頁)によると、日本では、狐は獲物として狩られるようになる前には、農作物の豐饒をもたらす動物として傳承されたり、また油揚げや赤飯を供して祀られたりした。明治時代以後、毛皮を取る目的で狩りの獲物とされてからは、神聖性が輕視されるようになったことが指摘されている。中國の狐も嘗ては何等かの神聖性を有する動物であつた可能性がある。

(一五) 註(七)前掲拙著第一章第四節「興詞に詠われた黃鳥」を参照。

(一六) 正月篇第二章と第五章は押韻法も異なる。第二章「父母生我、胡俾我癡。不自我先、不自我後。好言自口、莠言自口。憂心愈愈、是以有悔」(〇〇侯部韻)、第五章「謂山蓋卑、爲岡爲陵。民之訛言、寧莫之懲。召彼故老、訊之占夢。具曰予聖、誰知烏之雌雄」(〇〇蒸部韻)。

(一七) 「鳥」は聞一多が「鳥喻女」(『風詩類鈔』)と、女子を喻えたものと言ふ。

(一八) 檜風・匪風篇の詳しい解釋については註(七)前掲拙著五九九〜六〇三頁を参照。

(一九) 檜風・凱風篇の詳しい解釋については註(七)前掲拙著二〇三〜二〇六頁を参照。

(二〇) 高田眞治は「西周の盛時を懷うて、陳國の平安になることを希望する意味が見られる。今や陳國は、危亡に瀕しているので、古を懷うて今を傷むのである」(註(六)前掲書五二二頁)と、舊説を踏襲し、目加田誠も「思うにこれは、東に寓する者が、西の故郷の周を戀う歌であろう」(註(六)前掲書二八六頁)と解する。これに對し、白川靜は「東方に戌役などのために赴いている男が、故郷の女を戀うる歌。周節は周都から東方の魯に通ずる東西の大幹線道路。その道を、君子たちは車で疾風のように往來する。しかし役務に従う若者たちは、徒らにその道を顧みて、その道の果てにある家族や女のことを思うだけである。……要するに故郷に残している、なじみの女を思い出しているのである」(註(六)前掲書四二八頁)と、征夫が故郷を懷かしむ詩と解している。その他、境武男は「聞一多いう『婦人が其の夫の來歸をのぞむのであろうか』と。すると、風の音や車の音にも、その出征のときのおもいだされる。末章は囑歌として即興的に付加せられたものである」(註(六)前掲書三四六〜三四七頁)と、征夫の歸還を待つ婦人の詩と解している。

(二二) 詳しくは註(七)前掲拙著第三章第三節「境界神祭祀詩に就いて」を参照。

(二三) 詳しくは家井眞『詩經』の原義的研究(研文出版 二〇〇四年)第二章第一節「魚の興詞」を参照。

(二四) 「歸」は諸説「歸る」と讀む中、境武男だけが「歸ぐ」(註(六)前掲書三四六頁)と讀んでいる。

(二五) 「好音」は諸説これを「善き便り」の意とするが、これについても境武男が「好音は好言・善言。ここは祝いのことば」(註(六)前掲書三四六頁)と解するのが妥當であろう。例えば魯頌・泮水篇には「翩彼飛鵲、集于泮林。食我桑黹、懷我好音(翩たる彼の飛鵲、泮林に集ふ。我が桑黹を食し、我に好音を

懷れ」と、飛來した「鵲（＝祖靈）」が「桑扈（＝クワの實）」を食べるとある。これは降臨した祖靈が捧げられた供物を食することに他ならず、祖靈に祀りが受け入れられたことを示している。そしてその「鵲（＝祖靈）」に「懷我好音（我に好音を懷れ）」と諺うのは、福祿を約束する言葉を授かりたいという祀る側の願望であることがわかる。

（二五）詳しくは註（七）前掲拙著第一章第一節「興詞に諺われた水」を参照。

（二六）天帝が人間の生と死を司り、その命を鳥の形を借りた祖靈が人間に傳達すると信ぜられたことについては、註（七）前掲拙著第一章第四章「興詞に諺われた黄鳥」を参照。

（二七）「有卷者阿」の詳しい語釋については註（二）前掲拙稿『詩經』「寧風」詩考「一三二頁を参照。

（二八）「君子」が祖靈であることについては註（三）家井眞前掲書第三章第一節「『君子』に就いて」に詳しい。

（二九）小雅・鴻鴈之什・斯干篇の「似續妣祖」の詳しい解釋については註（七）前掲拙著五二頁。

（三〇）「有」が形容詞や副詞を作る助字であることについては註（七）前掲拙著三五頁。

（三一）境武男は根據を明示していないが、「四方爲則是四方之則である」（註（六）前掲書六七五頁）と指摘している。

（三二）例えば、境武男は「はるかな山野に出遊しての王者の神事。そして、多くの貴顯が参集し、盛大な歌舞が催され、新作の獻詩も發表せられる」（註（六）前掲書六七六頁）とし、目加田誠は「王の出遊に際して歌われたためたい頌徳の歌であらう」（註（六）前掲書六八九頁）、白川静は「宗教性のゆたかな出遊」を諺う詩として、「當時、このような仙遊の際に歌う定められた歌があったのであらう」（註（六）前掲書一〇七、一一〇頁）とする。

（三三）「有卷者阿、飄風自南」は、毛傳に「興也」とある如く興詞である。

（三四）註（六）赤塚忠前掲書八二頁。

※その他、語釋等に使用した工具書については註（七）前掲拙著の「引用参考文献」を参照。